第２節 泥めんこと銭貨

１． 銭貨と泥めんこの出土

すでに発掘調査のときから、銭貨と泥めんこの出土量の多さは顕著であった。しかも，これらは特定の場所に集中するのではなく散在的に出土していることが注目された。出土点数は，隣接する宅地防災地区（『鰍沢河岸跡』II報告分）を含め，寛永通宝を代表とする穴あき銭・甲州金・南鐐二朱銀・雁首銭さらに明治時代以降の近代硬貨などを含めた銭貨が1941点，泥めんこが273点である（ここで「泥めんこ」としたのは，箱庭道具・雛道具・土製碁石や背面まで立体的に成型された土人形を除いたものである）。

出土位置の詳細については，個々の検討が必要であるが，概ね立派な建物基礎の下から多く出土する傾向が強く、とくに蔵建物などの下で，礫層，砂礫層，砂質土層などを交互に突き固めた基礎の土層中からの出土量が多かった。礎石と思われる扁平な巨礫の周囲に銭貨が集中して出土し大黒柱に関わる祭祀に結びつくと思われる例がいくつかあり，また板材を組み合わせた便槽内からも比較的多くの銭貨が出土している。

２．全遺物の出土位置との比較

遺物の取り上げと整理方法

出土位置を検討するために，銭貨と泥めんこの出土分布図と全遺物出土分布図を作成した。発掘調査における遺物出土位置の記録は，主には光波測量機とコンピューターを連動させた遺物取り上げシステムを用いた（以下光波取り上げと略す）。この光波取り上げの対象としたのは，原則として銭貨・泥めんこは全点，陶磁器は概ねタテヨコ3cm以上の大きさのものとした。撹乱部分からの出土遺物は完形品であっても光波取り上げを行わなかった。こうしたデータをもとに，整理作業段階で，近代以降の磁器や銭貨などの包含状態から，地割ごとに上層・中層・下層・最下層の４層などに区分した。

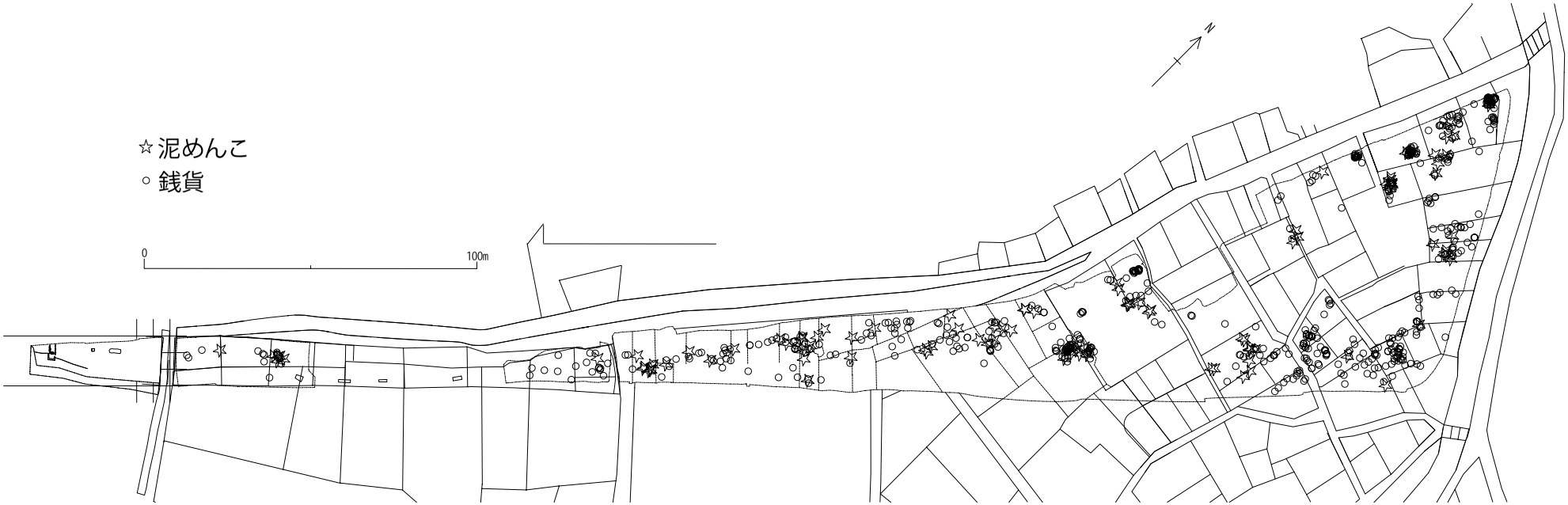
こうして地割ごとで各層に区分された遺物を抽出して平面図に描画したものが第6-2-1図から第6-2-6図である。上層としたのは近代の遺物を多く含むもの（近代）。中層としたのは近世を主体とするが近代の遺物を若干含むもの（近世～近代）。下層としたのは近代の遺物を含まないもの（近世）。最下層は鰍沢文政大火（1821年）以前に相当するものであるが，泥めんこに該当するものがなくここでは図化しなかった。

出土位置の検討

銭貨と泥めんこと全遺物の出土位置を検討すると，大雑把にみて撹乱を受けずに遺物包含層が遺存している場所では，銭貨や泥めんこが出土していることが判る。例外的なのが中層と下層での年貢米を収納した御米蔵跡付近である。全遺物の出土に比べて，銭貨と泥めんこの出土が少ない。上層ではこの場所からも銭貨と泥めんこの出土が多く見られるのは，御米蔵などが富士川運輸会社所有の民間の土地となったことに関連するものと思われる。これらの検討からみると，銭貨と泥めんこの出土は，幕府の公的な空間に希薄であり，民間の敷地に散在的に出土することを読み取ることができる。

こうして大量に散在的に遺跡に遺されている状況からすると，意図的に撒かれたものと考えられる。とくに建物基礎の構築時は時期的にも限定され，客土に混じっての混入する以外は，意図的に入れられたものと考えられる。便槽内からの出土についても，落し物を含むであろうが，主にはガラス製の鏡も含まれているなど，トイレの設置当初や廃絶時の奉納物が大部分を占めると考えられる。

平成16年に泥めんこを展示解説したおりに，甲府市在住の80歳（1925年頃生まれ）になる男性から「出土した泥めんこに類似したものを道祖神祭りのときに撒いた。それは荒物屋で袋入りのものを買った。」との聞き取りを得ている。

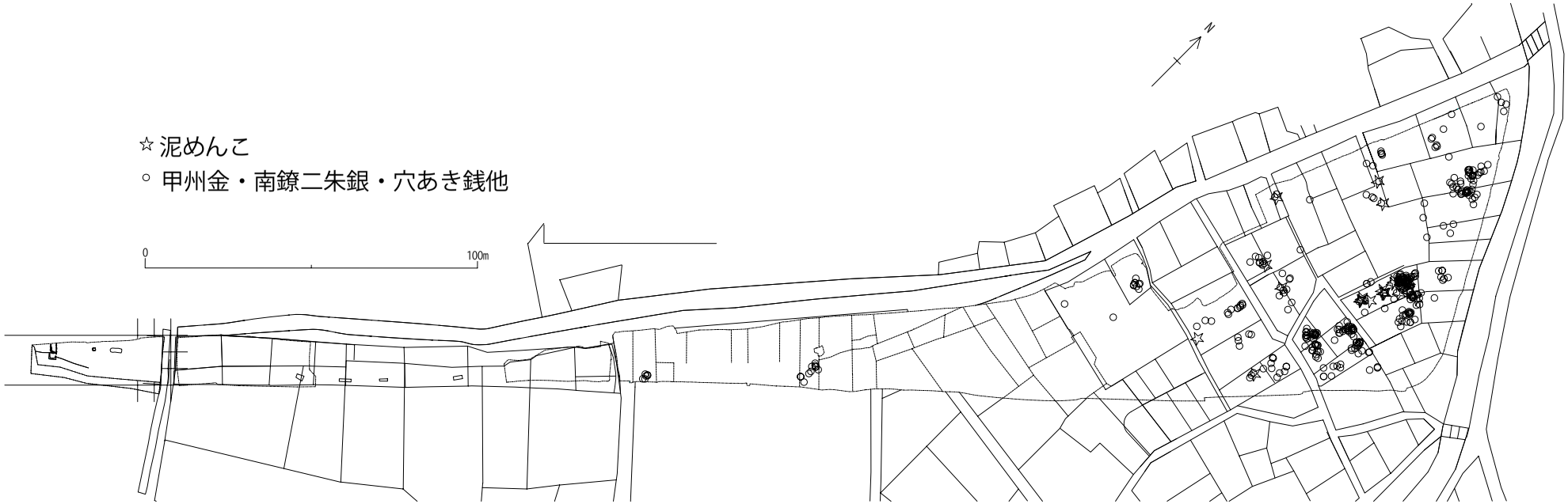


第6-2-1図　泥めんこ・銭貨出土分布図（上層）［1/1800］

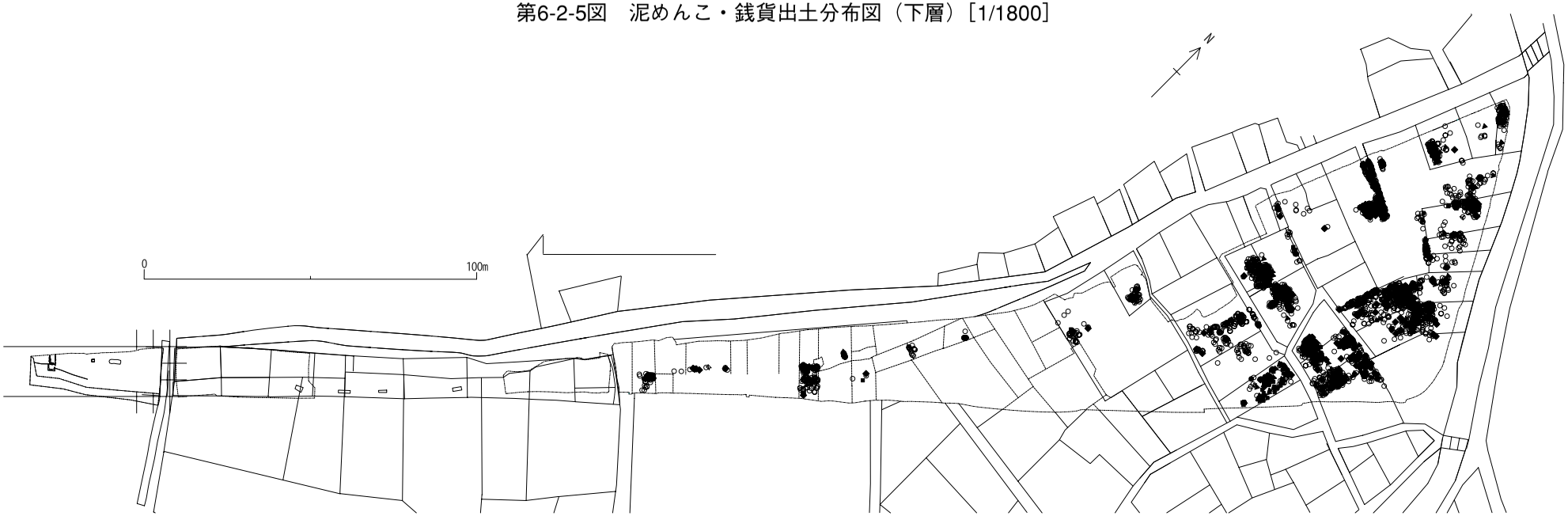
第6-2-2図　全遺物出土分布図（上層）［1/1800］

第6-2-3図　泥めんこ・銭貨出土分布図（中層）［1/1800］

第6-2-4図　全遺物出土分布図（中層）［1/1800］



第6-2-5図　泥めんこ・銭貨出土分布図（下層）［1/1800］



第6-2-6図　全遺物出土分布図（下層）［1/1800］

3．泥めんこの役割

『嬉遊笑覧』には，「今小児玩物のめんがたは面摸なり瓦の摸に土を入れてぬくなりまた芥子面とて唾にて指のはらに付る小き瓦の面ありしが今はかわりて銭のようにて紋形いろいろ付たる面打となれり」とあり，泥めんこがこれに当たると金刺伸吾（1974）は早くから指摘している。泥めんこは，江戸時代から子供の玩具として扱われてきたようである。

宮瀧交二（1990）は，江戸市中においては面打の出土が顕著であるが，下総，相模をはじめとする周辺地域では，面打よりも面摸の数が上回っていることをとらえ，この違はこれを用いて遊んだ子供達の階層差，ひいては都市と農村といった社会構造の相違と密接にあることを指摘している。さらには，文字や家紋を中心とした意匠が多い面打は武士・町人階級の子弟にとって一種の教育玩具的役割を担い，面摸の意匠は農村における民間信仰・年中行事などと関連した神仏像が多く採られることなど，当時の民衆意識に根ざした資料であると論じている。

鰍沢河岸跡で出土した泥めんこでは，円盤形で上面に文様をもつ「面打」はわずかに 9 点，これに対し神仏・人物・動植物・器財などを模った「面摸」は圧倒的に多く264点である。この「面打」の「面摸」の比率は、まさしく江戸周辺地域のものである。さらに鰍沢河岸跡では「面摸」の中でも，恵比寿・大黒・天神など神仏を象ったものが顕著である。小林稔（2002）が既に指摘しているように，こうした神仏像は子供が遊ぶためにつくられた玩具であろうかという疑問がある。また男性の性器を象った「面摸」もいくつか出土しており，これらは子孫繁栄を祈願したものであり，なおさら子供の単なる玩具としては捉えがたいものである。鰍沢河岸跡で出土した泥めんこは，子供玩具として使われたものを含んでいるであろうが，中心となるのは土地の神様へ奉納されたものあるいは邪気を払うために撒かれたものではないだろうか。また子供の遊びに使われたとしても，遊びの中で地鎮や邪気を払うことを期待されたとも考えられよう。

泥めんこは江戸時代の玩具に起源をもつが，江戸と周辺地域とではその用途に大きな違いをもって地域ごとに変遷をたどってきたようである。考古資料としては比較的新しい遺物ではあるが現在ではすでに，ひとつひとつが語る意味を理解することが困難になりつつある。泥めんこは民衆のこころを伝えるものであり，その意味を解明することは，今日の重要な課題である。

鰍沢河岸では，富士川から舟運によって富を得るとともに，同時に富士川がもたらす水害にも直接晒されてきた，大河川の影響を直接に受ける暮らしが営まれてきた。ここには人間の努力を超えた大きな力が存在していることを折々に実感する生活があったものと考えられる。こうした生活の中での祈願する心を伝える遺物の代表が泥めんこ・銭貨であり，これらの出土点数の多さは祈願する心の強さを反映したものと考えられよう。

（村石眞澄）

謝辞　宮瀧交二氏からは貴重な教示をいただくとともに，泥めんこに関連する文献に関して多大な協力を得たここの感謝の意を記す。

小林稔（2002）「鰍沢河岸跡出土の泥面子について」『研究紀要』18　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター，p 47-54,

宮瀧交二（1990）「『泥めんこ』の基礎的検討」，『インド考古研究』第13号　p 59-62

埼玉県入間郡大井町立郷土資料館，企画展『泥メンチの不思議』図録，p 1-20